

シリアからイラクへの「ムジャーヒドゥーン」潜入の経路と手法(研究資料)

著者	?岡 豊
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	現代の中東
巻	41
ページ	47-64
発行年	2006-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005749

シリアからイラクへの 「ムジャーヒドゥーン」潜入の経路と手法

高岡 豊

はじめに

- I 「メソポタミアへの新しい道」
 - II 「これがイラクへの道」
 - III CSIS報告書
 - IV 「ムジャーヒドゥーン売ります」
- 結びにかえて 今後の研究課題

はじめに

2003年3月のイラク戦争勃発当初から、米国の政府や軍関係者、さらにはイラクの高官はシリアからイラクへ戦闘員や武器が流入しているとしてシリアを非難してきた^(注1)。こうした非難は、治安安定化の試みにもかかわらず、イラクの政情が混迷を続けるなかで繰り返されている。

イラク国内で米軍等と戦う戦闘員・組織を思想やイデオロギーごとにはっきりと分類することは困難である。しかし、イラク国外からシリアを経由して入国する戦闘員については、二つの政治・イデオロギー潮流のいずれかに属すると考えられる。

第1に、イスラーム主義勢力である。彼らは、アブー・ムスアブ・ザルカーウィー(Abū Muṣ'ab al-Zarqāwī)が率いるメソポタミアのアル=カーイダ(Tanzīm al-Qā'ida fī Bilād al-Rāfidayn)^(注2)

に代表される武装組織や、こうした組織の主張や行動に触発されてイラク国内で武装闘争を行う戦闘員であり、自らを「ムジャーヒドゥーン」(mujāhidūn: ジハードを戦う者を意味する「ムジャーヒド」[mujāhid]の複数形)と称する。彼らは、「イスラームの地を十字軍・ユダヤ教徒の侵略から防衛する」との宗教的な動機によって戦闘に参加し、究極的にはイラクだけでなく他のイスラーム諸国にもシャリーア(sharī'a: イスラーム法)による統治を施行するという目標をもつ。また、彼らは現在のイラクの政府、治安部隊、政治過程に参加する者、シーア派勢力への攻撃を、背教者(murtadd)、拒否者(ラーフィダ[rāfiḍa]: シーア派に対する蔑称)に対する闘いとして宗教的に正当化している。

第2に、アラブ民族主義勢力である。サッダーム・フセイン(Ṣaddām Ḥusayn)政権の軍・治安機関の要員や、同政権時代の支配政党であるアラブ社会主義パース党(Hizb al-Ba'th al-'Arabi al-Ishtirākī)の党員や支持者がその主力である。彼らは、「正統な政権が打倒され、イラクがシオニズム・帝国主義勢力に占領されている」ことに抵抗するとのイデオロギー的動機に基づいて武装闘争を行っている。彼らは、イラク領から占領軍を排除し、政治体制をイラク戦争勃発前の体制に戻すこと、イラク戦争による被害を賠償

させること、などの政治目標を掲げている。また、現在のイラク政府を侵略者の手先、シーア派勢力を宗教的反動、と位置づける政治的・イデオロギー的論理でこれらへの攻撃を正当化している。

一方、シリアからイラクへの戦闘員（および武器）の流入は、主に四つの役割を担うアクターによって担われている。第1に、実際にイラクに密入国し、そこで武装闘争に参加する「潜入者」、第2に、潜入者を勧誘し、シリアへ送り出す「勧誘者」、第3に、潜入者を手引きする「案内者」、第4に、潜入者をイラクで受け入れ、実際の戦闘で指揮する組織・個人、すなわち「受入者」である。これらのアクターは相互補完的であり、そのすべてが揃ってはじめてイラクへの戦闘員流入が可能となる。しかし、従来の分析や報道では、勧誘、密入国、イラクでの戦闘という事実に関心を当てたものが多く、各アクターの役割については明確にされてこなかった。

本稿は、こうした点を留意しつつシリアを経由したイラクへの戦闘員（そして武器）の流入をめぐる問題、いわゆる「潜入（tasallul）問題」のうち、「ムジャーヒドゥーン」の流入に関心を当てる^{（注3）}。以下では、各節で、「潜入問題」に関する米国・イラクの対シリア非難が続くなかで発表された「潜入問題」についての注目に値する資料4点、すなわち、潜入の経路と手法を具体的に記した「指南書」や研究報告書を訳出・分析する。その上で、「結びにかえて」で、「潜入問題」を研究する上で説明の必要があると筆者が考える点を明らかにする。

I 「メソポタミアへの新しい道」

第1の資料は、インターネットの掲示板サイトである「ジハード主義フィルダウス・フォーラム（Muntadayāt al-Firdaws al-Jihādiyya, <http://alfirdaws.org/>）」に「メソポタミアへの新しい道」（Tarīq ilā Bilād al-Rāfidayn al-Jadīd, <http://alfirdaws.org/forums/showthread.php?t=2821>

2005年9月閲覧、本節の引用は同ページより訳出）との題で投稿された「指南書」である。この掲示板サイトは、イスラーム法学上の相談受付やアラビア語文学についての投稿コーナー、イラクやその他の地域で活動するイスラーム主義者の武装勢力が発表した声明、映像・音声を掲載するコーナー、ジハードへの参戦を希望する者向けに武器の扱い方についての情報や教本を掲載するコーナー、などからなっており、イラクの武装勢力の構成員・支持者や報道機関を対象に発表された犯行声明や扇動映像・音声を、広く流布させる役割を担ったサイトである。

「メソポタミアへの新しい道」は、2005年6月6日に同サイトに掲載された。その作者は、イラクでのイスラーム主義者による武装闘争を支持しているが、その潜入の手引きには直接関与していない人物だと推定できる。その理由は、作者が潜入者に対し調査のための旅行をして越境経路や案内者を探すよう勧めているにもかかわらず、案内者と受入者を事前に決定しなければ潜入が失敗に終わる可能性が高いこと（後述）を軽視しているからである。

「メソポタミアへの新しい道」の特徴は、潜入経路と経路周辺の住民の状況を詳細に記述している点である。しかし、本文中で越境路や越境

を支援する者についてはアラビア湾岸諸国に出稼ぎに来ているデイル・ゾール県出身者に尋ねるよう勧めていることから、「メソポタミアへの新しい道」はエジプト、マグリブ諸国、欧米に居住する潜入者にとっては物足りない内容だろ

う。経路についての「メソポタミアへの新しい道」の説明は以下のとおりである(図1)。

「私はシリアとイラクの国境地域に一時期在住していたことがあるため、当該地域のことを熟知している。また、これらの地

図1 潜入経路図



- ◄■■■■► : 地域A-1 = クルド地域のため潜入困難。
- ◄■■■► : 地域A-2 = 人口密度の低い部族地域。潜入は容易だがイラク側の受入者が不可欠。
- ◄■■■■► : 地域B = 人口密度が高く、潜入者の手引きも容易。特に太線の地域を指すと思われる
- ◄■■■► : 地域C = 人口密度が低く、シリア側は軍の施設や政治犯刑務所が多数あって警戒が厳しいため潜入は「不可能」。

(出所)「メソポタミアへの新しい道」をもとに筆者作成。

域の住民と若干の親戚関係があるため、当該地域の子弟について多くの知識がある。したがって、私は本件を知らしめ、同胞たちに役立てることを自分の義務と思う……。

シリア・イラク国境地域は、約500キロメートルにわたる。この地域は、次のように分類される。

A 約230キロメートルにわたる北部。この地域は二つに区分されるが、第1のシリア最北の部分にはクルド人が国境の両側に居住し、シリアとイラクをチグリス河が隔てている。この地域は約100キロメートルにわたるが、越境は困難なのでこの地域には行かないよう忠告する。第2の部分は南側の約130キロメートルにわたる国境地域である。この地域には10キロメートルおきに国境警備要員が展開しており、アラブ部族(カバール、qabā'il qabilaの複数形)民が大きくはない集落でベドウィン風の生活を送っている。この地域は、シリア側はハサカ県に属し、イラク側にはモスル県(注4)とモスル市がある。この地域は越境が容易であるが、イラク抵抗運動の側の真正で信頼できる受入者がいることが基本的な条件である。

B 中央部は、シリア側はデイル・ゾール県、イラク側はアンバール県に属する。この地域は以下の諸事情によりムジャーヒドゥーンの越境が最多の地域である。

①当該地域の住民は、イラク側と親戚関係で結ばれている。この地域では、部族(アシャーイル、'ashā'ir 'ashiraの複数形)が2国に分かたれているのがみられる。

②ムジャーヒドゥーンに対する当該地域

の住民の激しい共感。彼らの子弟は、イラクのさまざまなジハード派(ファサーイル、faṣā'il faṣilaの複数形)に参加したり出資したりしている。彼らの一部では、ある月はイラクでジハードを行い、ある月は家族のところに戻っているのがみられる。

③当該地域の住民の、イスラームとアラブ的習慣・伝統への執着。

④シリアの体制、特に支配的なヌサイリー派(注5)に対する彼らの激しい嫌悪。彼らの多くは、ヌサイリー派の何もかもを公然と憎んでいる。

⑤サウジアラビア王国、イラク、クウェートの部族(アシャーイル)の首長と彼らの結びつき。その例は、シャンマル(Shammar)族、バカラ(al-Bakāra)族、アカイダート(al-'Akaydāt)族、ブーハリース(al-Būkharīs)族のような諸部族(カバール)であるが、これらはその起源を上記の諸国にもち、彼らの一部はこれらの諸国の国籍保持者である。

⑥シリアの体制に無視されているとの彼らの激しい感情。デイル・ゾール県では、シリアの石油、小麦、大麦、綿花の約60%を生産しているが、彼らはシリア国家から何も得ていない。彼らは、一般に貧困と欠乏の生活を送っている。

⑦デイル・ゾール県の人口は約120万人に上る。彼らのうち、約35万人はアラビア湾岸のアラブ諸国で働いており、貴方は貴方自身の国で彼らと知り合いになったり、越境路について尋ねたり、越境の手引きを職業としている者たちについて尋ねたり、助言を求めたりすることが簡単にできる。

⑧国境に接する所に人口密度が高い集落があること。シリアのブー・カマル市の人口は約12万5000人に上り、同市はイラクとの国境から3キロメートルしか離れていない。30分も歩けばイラク側のカーイム市に着くだろう。カーイム市は人口5万人で、イラク抵抗運動が完全に制圧している。

⑨国境上でムジャーヒドゥーンと米軍との衝突が多発している。このため、米軍は普段は越境を阻止するための作戦を行えないでいる。ムジャーヒドゥーンにとって双方向の越境が容易である。

⑩双方の国境上に村落が点在しており、一部の村については半分がシリア、半分がイラクに分割されている。

⑪当該地域の住民は、湾岸地域の方言に近いイラク方言を話す。

C 国境南部の地域は、シリア側はヒムス県、イラク側はアンバール県に属する。この地域は砂漠の非居住地域であり、諸般の軍事管区とシリア軍の兵器集積地、シリアの政治犯刑務所が設けられている。この地域について、シリアのアブー・シャーマートから始まるダマスカス・バグダード間の国際道路が横切っていると説明する者がいるが、この地域は軍と情報機関が多数いる。そして、イラク側にもシリア側にも住民はいない。この地域の警戒が最も厳しく、ここからの越境は不可能である。

シリア国内での行動について、8点にわたり細かく留意点を述べていることも「メソポタミアへの新しい道」の特徴である。

「①シリアの礼拝所のいかなるイマームも信用しないこと。彼らはシリアの公務員

であり、シリア政府はイスラームと公然と敵対している。シリアの礼拝所のイマームは、すべて国家に忠誠を誓った者である。彼らがスーフィーであれ、そうでない場合であれ、シリアのイマームたちはシリアの情報機関に毎日報告書を提出している。アレppoのムフティーであるアフマド・[バドルッディーン・[]は筆者、以下同じ]ハッスーン(Ahmad[Badr al-Dīn]Ḥassūn: シリアの現共和国ムフティー)の話は有名である。彼らはシリアで広がりつつあるジハード主義的サラフィー主義潮流(al-tayyār al-salafī al-jihādī^{注6)})と最も激しく敵対する者である。

②貴方の国を発つ前は、ひげを伸ばす、衣服の裾を詰めるというサラフィー主義的外見をやめること。

③音楽のテープやタバコの箱のような欺瞞用の品物を持つこと。

④潜入を決行する前に調査のための旅行をすること。この旅行は、調査をしたり越境経路と関係者を見つけたりするための旅とし、目的地はイラクとの国境のデイル・ゾール市にすること。不審がられないようにするため、同市には車で入るよう勧める。その際は、表向きの目的を観光や川釣りとし、大金を持って行かないこと。デイル・ゾールにはユーフラテス河があるので、観光や川釣りに使う物を持って行くこと。最も望ましいのは、疑いを生じさせず、なおかつ出費を抑えるために他の誰かと一緒に旅行することである。デイル・ゾール県は生活費が安い県であり、四つ星ホテルでダブルベッドの部屋に15日滞在するには300

ドルで十分である。ガソリン1缶の値段は10ドルであり、食費はきわめて安い。

⑤同地の諸都市(デイル・ゾール、マヤーディーン、アシャーラ、ブー・カマル)の住民とは可能な限り付き合いを限定すること。

⑥同地では、礼拝所でサラフィー主義者の若者に絶対近づかないこと。彼らは、通常礼拝所で監視されている。礼拝所の外、十分に離れた所で彼らと会うよう試みよ。

⑦シリアに入国する際、警官が賄賂を求めることに苟立つな。これは彼らの習慣である。しかしながら、最近政府は警察に対しアラビア湾岸諸国から来た車を停車させて賄賂を要求しないよう通達した。

⑧治安上の規則をやぶらないこと。」

以上の留意点のなかで興味深いのは、シリア国内の宗教施設や宗教者を信用しないよう注意を促している点、シリアに入国する際にイスラーム主義者であることが判明しないよう服装や持ち物を偽装するよう勧めている点である。この点から、シリア当局がモスクに出入りする者や、外見からイスラーム主義者と判別できる者を監視の対象としていることが示されているからである。

一方、デイル・ゾール県のユーフラテス河沿いの主要都市・集落であるデイル・ゾール、マヤーディーン、アシャーラ、ブー・カマルを挙げて、「地元民との付き合いを可能な限り限定する」よう勧めている点は、経路周辺の住民がムジャーヒドゥーンに強い共感を抱いていると紹介されていることと矛盾しているようにも思われる。しかし、シリア国内での留意点として「治安上の規則をやぶらないこと」も挙げている点と併せて考えると、「地元民との付き合いを限

定せよ」との留意点は、「シリア国内では目立たないようにせよ」と助言しているものと解釈できる。すなわち、最も潜入が容易な地域においても、潜入者が無警戒に案内者や仲間を探し回ったり、公然と潜入準備をしたりするような環境ではない、ということが明らかになるのである。

なお、上で指摘したとおり、作者が直接潜入を手引きしているのではないと推測できることから、作者がイラクのムジャーヒドゥーンから直接情報を得ている可能性も低いと考えられる。事実、イラクの受入者との合流に関する留意点も以下のような金銭についての一般的な助言にとどまっており、イラク側のどの団体が潜入者を受け入れているのかについての具体的な情報に言及していない。

「イラクのムジャーヒドゥーン同胞たちへの金銭を忘れるな。越境経路を見つけた際の2回目の旅では金銭を持参せよ。イラク人ムジャーヒドゥーン同胞の一部は、厳しい状況のせいで自分の武器を売らざるを得なくなっているらしい。彼らのことを忘れるな。」

Ⅱ 「これがイラクへの道」

第2の資料は、インターネットの掲示板サイトである「ヒクマ・フォーラム(Muntadā al-Hikma)」(<http://www.hkmah.net/>)に2005年6月上旬に投稿された資料「これがイラクへの道」(Hādhihi Hiya al-Ṭarīq ilā al-'Irāq, <http://www.hkmah.net/showthread.php?t=8953> 2005年6月閲覧、本節の引用は同ページより訳出)である。「ヒクマ・フォーラム」は、2005年5月から6月にかけてイ

スラーム主義者がイラクの武装勢力の声明や映像を盛んに転載した掲示板サイトであるが、6月以降サイトの運営者が声明等の転載されるコーナーを閉鎖し、武装勢力が発表した声明等の投稿を拒否したことから、サイトそのものは武装勢力の声明やジハードについての情報を広める機能を失ったと思われる。

作者は「イスラーム博士／ヒクマ・フォーラム」(al-Duktūr al-Islāmī/Muntadā al-Hikma)との署名をしている。この名は2005年5月と6月に「ヒクマ・フォーラム」に多数の投稿をした人物が利用したハンドルネームである。作者とイラクの武装勢力や案内者との関係は不明であるが、作者は本文中で案内者から直接情報を得ていることを示唆している。

「これがイラクへの道」は、シリアからイラクに潜入する具体的な経路や地理的情報についてまったく言及していない。しかし、この資料は、トルコから陸路でシリアに入国し、その後イラクに潜入せよとの重要な情報を含んでいる。この経路は、『毎日新聞』(2006)が2005年11月に米軍に対する自爆攻撃を実行したベルギー人女性とその夫がイラクに潜入した経路として報じたものである^(注7)。すなわち、「これがイラクへの道」は、実際に自爆要員が潜入に用いた経路を潜入者に伝えていたのである。また、「これがイラクへの道」が、案内者なしで出発した潜入者の多くがシリア軍に捕らえられたとして、出発前に案内者を確保する必要性を指摘している点も興味深い。「これがイラクへの道」は、潜入経路について以下のとおり解説している。

「サラフィー主義ムジャーヒドゥーンは、複数の小集団をイラクへと送っている。…
…シリアを経由して。……同胞よ、シリア

の体制が出入国の諸事を厳しくするようになったことに注意せよ。貴方のシリア入国をトルコからの陸路にせよ。……

貨物車の運転手、あるいは労働者、あるいは車商人など、これまでにパスポートに出入国スタンプが押された者はイラクに入国することができる。……

それ以外の者のイラク入国は困難である。……アラブ人は、イラク政府から事前にビザを取得しなくては入国できない。このビザは、米国が同意した者に発行され、通常40歳未満の若者の申請は拒否される。……

同胞よ、シリア軍が捕らえた者の多くが案内者なしに出発しており、彼らが捕らわれたことは自己責任であることを確認せよ。案内者の1人は、シリアの当局は抜け道を使うムジャーヒドゥーンに注意を払っておらず、国境の諸都市を経由してイラクへ至る幹線道を使用するムジャーヒドゥーンを集中的に取り締まっていると言っている」。

「これがイラクへの道」は、シリア入国の際にシリア当局を欺いて取締りや監視を逃れる方法について具体的な情報を提供している。欺瞞のために服装と持ち物に配慮するよう勧めているほかに、シリア当局が潜入者の家族に連絡をとる可能性があることを指摘し、シリア当局に対する強い警戒感を示している点が興味深い。シリア当局を欺く方法は、以下のとおり解説されている。

「貴方の家族に対し、貴方のシリア入国を知らせておく必要性は非常に高い。シリア当局の者が貴方の家族に電話し、貴方方

のことを尋ねるかもしれない。家族には、シリア入りの理由を観光、治療などの嘘の理由を伝えておけ。または、シリアでの就学を希望すると主張する場合は、主張を裏づけるために必要な書類を準備すること。トルコの入国ビザを取得し、シリアを経由してトルコへ行くと主張してもよい。……シリア当局を欺くため、ジーンズを着用し、さまざまな歌のテープを入れたウォークマンを使用するようにせよ。ジハードのために服装や持ち物を偽装しても罪にはならない。戦争とはだましのことである」。

シリアへ向けて出発する前に案内者を確保することが必須と言及していることもまた、「これがイラクへの道」の特徴的な点と言える。「これがイラクへの道」は、案内者の役割について、単にイラクへの潜入を手引きするだけでなく、イラクへ潜入した後に潜入者を受け入れる武装勢力まで送り届ける役割があると指摘している。

加えて、「これがイラクへの道」は、潜入者がインターネットの掲示板サイト上で案内者と接触することが可能であると指摘している。もしこれが事実であれば、インターネット上で案内者と接触できる場合、インターネットの使用環境さえ整っていればいかなる場所に居住していてもイラクに潜入し、ムジャーヒドゥーンと合流する可能性があることになる。

この点から、「これがイラクへの道」が情報を提供しようと試みた対象は非常に広いということがわかる。しかし、インターネットを通じて潜入に必要な情報や案内者を得ようとする際には、偽情報や単なるいたずら書きレベルの投稿に惑わされる可能性がある。「これがイラクへの道」は、偽情報やその作者に対する対策にも

以下のように言及している。

「ジハードに参加するための精神的準備ができた後は、案内者を探す段階に入る。案内者とは、貴方をイラクに到達させるだけでなく、同地のジハード団体の一つ (ihdā al-jamā'at al-mujāhida) やウサーマ・ビン・ラーディン (Usāma bin Lādin) 師が先般の説教^(注8)で言及した信頼できる者たちまで到達させる案内者のことである。……

イラクへの案内者であるジハード主義的サラフィー主義者のひとり、イラク内部のジハード団体まで到達させてくれる案内者なしでイラクに至った者は、ひどい困難にさらされると述べている。このことを言わない者は、イラクへの潜入について知識がない者である。

案内者となるサラフィー主義ムジャーヒドゥーンは、我々から遠くにいるのではない。そうではなく、我々のすぐ近くにいたのだが、彼らと接触するには若干のアッラーの恩恵を必要とするとともに、危険がある。彼らの一部に近づくだけでも貴方は告発にさらされるかも知れない。……彼らとの接触を完全に秘密とするよう努めよ。共通の知り合いの紹介によって彼らと接触してもよい。……

同胞たちよ、私は貴方方にこれらのサラフィー主義ムジャーヒドゥーンは我々のフォーラムにいる者たちなのだと言いたい。……

同胞たちよ、さまざまな掲示板サイトにはジハードへの道を知っていると主張する者たちからの虚偽情報と、情報の見返りとしての金銭要求が投稿されている点に注意

せよ。虚偽情報を投稿し金銭を要求する者たちは、判断力のある者に見破られている。虚偽情報の投稿者の語学力は低く、イスラム法の知識も限られている。長期間同行し、信頼できると確信した相手以外に金銭を与えてはならない。

同胞よ、虚偽情報の見返りに金銭を要求する者たちと本当に金銭を必要とするムジャーヒドゥーンとを混同しないよう注意喚起する。」

「これがイラクへの道」は、イラクで潜入者を受け入れる団体について具体的な組織名を挙げて言及している。この点は、受入者を明示する非常に重要な情報であると考えられる。名前を挙げられた団体はメソポタミアのアル=カーイダと1920年革命部隊(Katā'ib Thawra 'Ishrīn)^{注9)}の2組織であるが、前者は、Hasan(2006)が非イラク人のアラブ戦闘員の構成員がいると報じているとおり、アラブ諸国やそのほかの外国のアル=カーイダとつながりを持ち、潜入者を受け入れていると考えられる。一方、後者に関して、Hasan(2006)は、ムスリム・ウラマー協会(Hay' al-'Ulamā' al-Muslimīn)とつながりがある団体として報じている。

なお、Hasan(2006)は、イラクのイスラーム主義武装勢力を外来の団体と地元の団体とに分類し、外来団体であるメソポタミアのアル=カーイダと1920年革命部隊を含むイラクの地元の団体との間に対立があるとしている。このため、1920年革命部隊がイラク国外からの潜入者を実際に受け入れている場合は、イラクの武装勢力を外来の団体と地元の団体とに峻別する分析枠組みとイラクのスナ派ウラマーが米国との戦闘のなかで果たす役割の評価を再検討する必要

が生じる。

Ⅲ CSIS 報告書

第3の資料は、米国のシンクタンク、戦略国際研究センター(Center for Strategic and International Studies:略称CSIS,1962年設立)が2005年9月に発表した「イラクにおけるサウジアラビア人戦闘員 推計とサウジアラビア王国の対応」[Obaid and Cordesman 2005]と題する報告書である。同報告書は、題が示すとおりサウジ人の潜入者の人数や潜入の手法に焦点を当てた報告書であるが、アラブ人潜入者の総数についての推計や、シリア経由でイラクに潜入を試みたサウジ人潜入者の取調べをもとにした事例研究を含んでおり、シリアからイラクへ潜入する経路と手法を分析する上で重要な報告書である。

報告書は、シリアはサウジ人などのアラブ戦闘員によるイラクへの潜入対策の上で最大の問題であるとして以下のとおり述べている。

「シリアは、明らかに最大のイラクへの潜入経路である。しかしながら、380マイルのイラクとの国境を戦闘員が越えることを阻止することは膨大な労力を要する。

2004年には約310万人の観光客がシリアを訪れ、2005年1月から7月にシリアに到着したサウジ人は、2004年の同期間に比べ4万人増加して27万人となった。合法的な来訪者と戦闘員を区別することはほぼ不可能であり、サウジの戦闘員は一般の入国者と戦闘員を区別できないという状況に乗じている。

シリアからイラクに入る戦闘員の大半

は、シリア北部の遊牧のスナ派アラブ部族民がまばらに居住している山間地の南の地点か、デイル・ゾール県の東方からイラクのアンバール県へ越境している。主に砂漠で、シリア軍や米軍が多数展開している国境の南の部分からの越境はほとんど行われない。

デイル・ゾール県からの越境が潜入者に好まれるルートである。国境の両方の住民の多くは武装勢力に好意的であること、国境沿いに村落が点在しておりこれを隠れ蓑として越境するのが容易なこと、当該地域では武装勢力による攻撃が常時発生しており、米軍に越境を阻止する余裕がないと考えられること、がその理由である。諜報情報をもとに推測すると、サウジ人やその他のアラブによる重要な越境地点は パープ・アル＝ワリード (Bab al-Waleed) 通関地点である 〔 Obaid and Cordesman 2005, 10-11 〕。

以上のように、CSISの報告書は潜入の経路としてパープ・アル＝ワリードという具体的な地名を挙げている。しかし、潜入経路についての記述には問題点がある。それは、報告書がアラブの潜入者にとって重要な越境地点として言及したこのパープ・アル＝ワリードがシリアとイラクの国境沿いのどの地点にあるのかまったく記述していない点である。

一般的な地図でシリア・イラク国境線沿いにパープ・アル＝ワリードやアル＝ワリードという地名を探した場合、アンバール県西部に該当する名称の都市が発見できる。しかし、その都市はシリアがイラクとの国境に設けた公式の通関地点であるタンフのイラク側に位置しており、CSISの報告書が潜入はほとんど行われない

と記述した地域に位置していることになる。すなわち、CSISの報告書が挙げたパープ・アル＝ワリードと地図上で発見できるパープ・アル＝ワリードが同一の場所を指す場合、CSISの報告書は潜入がほとんど行われないと指摘した地域の地名を潜入者の重要な越境地点として言及するという矛盾した記述を含んでいることになる。あるいは、シリアとイラクとの間に設置された公式の通関地点に位置するパープ・アル＝ワリードが潜入者にとって重要な越境地点であることが事実であるとするならば、シリアを経由してイラクに潜入する者の一部が合法的にシリアに入国して合法的にイラクへ向けて出国しているか、イラク側の通関所管理に重大な欠陥があるということになるのである。

CSISの報告書は、シリアにおける潜入者の取締りが厳しくなり、一般のサウジ人観光客さえもその対象となっているとしている。報告書は以下のように述べ、シリア当局によるサウジ人観光客への虐待　それがどこで発生したかは明言していないが　を指摘している。

「シリア当局が、国内におけるサウジ人に対し過剰な取締りをに行っていると主張する者もいる。最近では、シリアがサウジ人観光客に対し組織的な虐待、殴打、略奪を行っているとの報告もあるが、シリアはこのような報告を否定している」〔 Obaid and Cordesman 2005, 11 〕

CSISの報告書は、実際にサウジからシリアを経由してイラクに潜入しようとした潜入者の調べ情報に基づき、潜入の事例を紹介している点でも資料的価値が高い。報告書は潜入に成功した者の例と、イラクとの国境まで行ったものの潜入せずに帰国した者の例を以下のように紹

介している。

「潜入の事例その① 24歳のサウジ人男性は近所[サウジアラビア国内]のモスクで金曜礼拝に参加，モスクの導師は，米国を非難し，無辜のイラク人が死亡する例に言及した。

同人と友人3名は，モスクの中位の聖職者との会合に出席するようになり，間もなく，会合でお金を出すか，彼ら自身が出かけるかしてイラクに対する支援を申し出るべきだとの提案が出た。

この聖職者は，サウジ当局が指名手配しているイエメン人のアル＝カーイダ活動家に近い人物だった。同人は，若者たちをこの活動家に紹介した。

若者たちはリヤドの隠れ家にいるこのイエメン人を訪問し，5週間にわたりジハードについて教育を受けた。

彼らは，自費でダマスカスへの片道航空券を購入した。彼らは，ダマスカスで滞在する場所を教えられており，彼らと面会する手筈のシリア人の電話番号を与えられていた。彼らはこの人物に接触し，この人物は彼らをイラクとの国境へ連れて行った。連れて行かれた場所はアル＝ワリード(al-Waleed)^{注10)}地点で，同地からはサウジ人がイラクに頻繁に入国している。国境ではイラク人3名が彼らを迎え，所持金をすべて渡すよう求めた。彼らはティクリートに連れて行かれた。ダマスカスに着いてからティクリートに到着するまでに要した期間は3週間だった。

潜入の事例その② 22歳のブライダ(Burayda：サウジアラビア王国カシーム州の

都市で，同国の首都リヤドの北西に位置する)出身の男性も，小さなモスクで扇動されジハードについての会合に参加するようになった。会合の後，同人や約8名の者がイラクに潜入する志願者となるよう求められた。彼らは会合で講義したシャイフと個別に面談し，8週間のうちに全員がイラク行きに同意した。

シャイフは，直接イラクに行くのではなく最初はシリアに行くよう助言し，ダマスカスにいる仲間のシャイフの電話番号を教えた。

志願者のうち3名が空港に到着，数日間の教義教育の後国境へ連れて行かれた。彼らはイラクとの国境に隣接する小村で7日間待ったが，イラクからの案内者は来なかった。その後彼らは別の地点に連れて行かれ，イラク側の案内者と接触した。案内者は，所持金とパスポートを渡すよう要求したが，この男性は国境へ行くことを拒みリヤドに帰った」[Obaid and Cordesman 2005, 18-20]

以上二つの事例を精査すると，そこには次のような四つの共通点があることがわかる。

- ① 潜入者は単独でシリアに出かけるのではなく，出身国(出身地)のモスクで勧誘され，潜入の候補者として教育を受けた上でシリアへ出発している。
- ② 潜入者はシリアに出発する前にシリアで連絡をとるべき人物や滞在するべき場所を伝えられている。
- ③ イラクに潜入の際に，受入者が現れている。
- ④ シリアでの案内者やイラクでの受入者の人選，そしてイラクへの潜入地点や潜入後の

行き先の決定に、潜入者本人はまったく関与していない。

この共通点を総合すると、「潜入問題」の四つのアクターである潜入者、勧誘者、案内者、受入者が揃っており、各々が連絡をとりつつ役割分担していることがわかる。この点を踏まえると、潜入の成否を決定するのは潜入者個人の資質や運ではなく、勧誘者、案内者、受入者の間で相互の連絡と潜入者の受け渡しがうまくいくか否かであることがはっきりする。

IV 「ムジャーヒドゥーン売ります」

第4の資料は、インターネットの掲示板サイトである「ムンタダー(al-Muntadā)」(<http://www.montada.com/>)に2005年9月17日に投稿された「ムジャーヒドゥーン売ります」(Mujāhidīn li-l-Bay', <http://www.montada.com/showthread.php?t=418411> 2005年9月閲覧、本節の引用は同ページより訳出)と題する書き込みである。

「ムンタダー」は、政治、経済、家族問題、イスラーム、アニメなど多数の項目についての投稿コーナーを設けている大規模な掲示板サイトであり、さまざまな趣味をもつ一般の人々が利用している。投稿者の「jehad-pal」は、2004年10月に同掲示板に利用者として登録、「ムジャーヒドゥーン売ります」を投稿するまでに282件の書き込みをしているが、報道や他の掲示板サイトで流布した記事をコメントとともに「ムンタダー」に投稿していたと思われる。したがって、「ムジャーヒドゥーン売ります」の内容の信憑性や、これが真面目な投稿であるのかという点には疑問が残る。しかし、案内者と米軍の「取引」を指摘したその内容は実に興味深い。す

なわち、「ムジャーヒドゥーン売ります」では以下のように記されている。

「数日前、UAEの『ハリージュ』(*al-Khalij*)紙に滑稽なニュースが掲載された。ニュースの詳細は以下のとおり。これまでサウジのムジャーヒドゥーンをイラク国内へ送っていたシリア人密輸商人たちが、これらのムジャーヒドゥーンをムジャーヒド1名につき1万5000ドルで米国人に売却しはじめた。密輸業者は、ムジャーヒドから[密入国の案内]手数料を取り、その上で[米軍から]この金額の報酬を得ているのである。ムジャーヒドはジハードを志して家と祖国を捨てたのだが、闘うことなく米国人に逮捕された。

さらに滑稽なことに、ムジャーヒドゥーンはかかる詐欺行為に気づき、シリア経由でイラク入りすることを避けるようになった。そのせいでムジャーヒドゥーン販売業に悪影響が出た。そこで、シリア人密輸商人たちはサウジ人観光客を誘拐し、彼らをムジャーヒドゥーンであるとして米国人に売却するようになった！現在サウジの外務省は、シリアの外務省とともにシリア観光に訪れた後行方不明となったサウジ人教師5名を捜索中である。」

こうした取引の存在は、潜入者、勧誘者、受入者の三者と案内者が組織的つながりや信頼関係をもたない場合があること、さらには案内者が政治的・思想的意志(対米武装闘争への意志)を欠いている場合があることを示していると言える。

結びにかえて 今後の研究課題

以上の各節では4点の資料から重要な箇所を訳出し分析したが、これらを比較すると以下の4点の特徴を指摘できる。

第1の点は、シリア経由でイラクへの潜入の成否が案内者との接触の有無によって左右されていると言及されていることである。「メソポタミアへの新しい道」は、アラビア湾岸諸国へ出稼ぎに来ているデイル・ゾール県出身者に尋ねるか、調査のための旅行をするよう勧めている。「これがイラクへの道」は、案内者がいない者はシリア軍に捕らわれており、インターネット上で案内者と接触することができると述べている。そして、CSISの報告書の事例研究では、潜入者はモスクで勧誘されそこでシリア入国後の連絡先を与えられている。3点の資料はそれぞれ案内者と接触する方法が違うものの、潜入者がシリアへ出発する前に案内者と接触する必要があると述べている点で共通している。

第2の点は、シリア当局による取締りについての言及と、当局の取締りを逃れる方法について言及されていることである。「メソポタミアへの新しい道」と「これがイラクへの道」は、取締りを逃れるためにシリア当局を欺くことについて言及し、服装、携帯品、素行などでシリア入国の目的を偽り、シリア当局を欺くことを推奨している点で完全に一致している。この点は、シリア当局がどのようにして潜入者を監視しているか、そしてそれに対し潜入者がどのような対策を講じているかを知る上で非常に重要である。

第3の点は、「メソポタミアへの新しい道」とCSISの報告書に限られた特徴であるが、潜入経路について具体的な地名が示されていることである。この二つの資料は、いずれもシリア北部のアラブの部族が住む地域で潜入が可能であること、デイル・ゾール県のユーフラテス河沿いの地域は、地元民がムジャーヒドゥーンに同情的な上、シリアとイラクの国境沿いの村落に隠れて越境することが容易なため、デイル・ゾール県からアンバール県への潜入が多いことに言及している。すなわち、二つの資料は、ハサカ県からイラクのニナワ県に入る経路とデイル・ゾール県からイラクのアンバール県に入る経路という二つの経路があることを示しているのである。

第4の点は、「潜入問題」のアクターである潜入者、勧誘者、案内者、受入者の四者のうち、案内者についてはシリア人の業者が案内者としての役割を担っている可能性があることを指摘している点である。これについては、「メソポタミアへの新しい道」が潜入者に対し越境の手引きを職業としている者についての情報を得よう勧めている。また、「ムジャーヒドゥーン売ります」はサウジ人のムジャーヒドゥーンをイラクへ送っているのはシリア人の密輸業者であると述べている上、密輸業者がムジャーヒドゥーンを米国人に引き渡していると述べている。ここから、潜入が行われる地域の地元のシリア人業者が商業の一環として案内者の役割を担っている可能性があることがわかる。

以上が「指南書」や「潜入問題」についての研究報告の諸特徴であるが、「潜入問題」を分析するには、こうした文書の分析だけでは不十分である。「潜入問題」の分析においては、潜入そのものの成否がどのような要因によって左右され

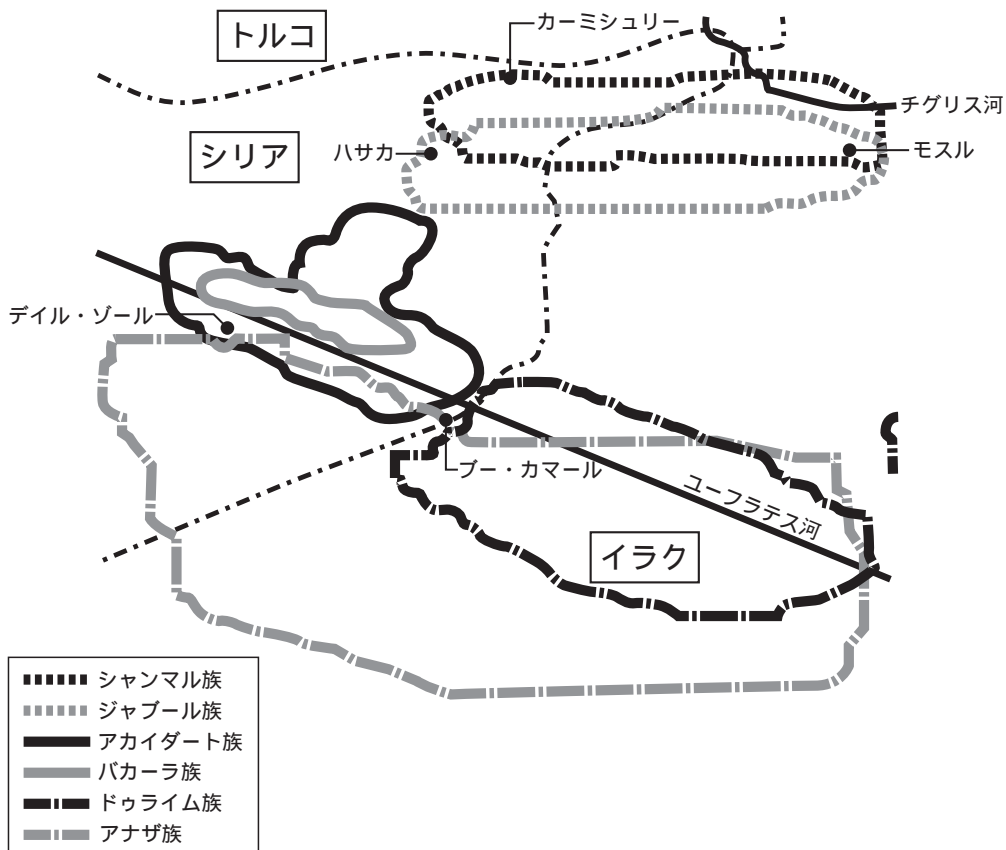
るかを解明することが最も重要である。現在までの筆者自身の研究を通じ、潜入の成否は潜入者がシリアに出発する前に案内者を確保しているか否かということと、案内者その他のアクターとの関係に大きく左右されていることが明らかになりつつある。すなわち、案内者は潜入の成否を左右する上できわめて重要な存在であり、どのような者が案内者の役割を担っているかを明らかにしなくてはならないのである。

これについては、潜入経路沿いの住民が案内

者の役割を担っている可能性がある。例えば、Castaneda(2005)は、モスルやタル・アファル西方のシリアとの国境に近い地域における武装勢力の潜入や物資輸送について、人間が同行しなくても慣れた道を忠実にたどるロバの隊列を利用した密輸隊列が利用されており、このような手法は国境のシリア側とイラク側に根を張る部族民による密輸で用いられていると指摘している。

経路沿いの住民について詳述した「メソポタ

図2 潜入経路沿いの有力部族の分布



(出所) Zakariyā(1997), al-Ḥamad(2003)をもとに筆者作成。

ミアへの新しい道」とシリアとイラクにまたがるジャズィーラ(al-Jazīra)と呼ばれる地域の部族についての研究であるZakariyā(1997)とal-Hamad(2003)によると、経路沿いに居住する有力な部族として、シャンマル族、ジャブール(Jabūr)族、アカイダート(al-'Aqaydāt)族^(注11)、ドゥライム(Dulaym)族、バカーラ(al-Baqāra)族^(注12)、アナザ('Anaza)族の6部族を挙げるとともに、図2のとおり分布図を描くことができる。分布図を見ると、これらの部族の居住地は上で挙げた二つの潜入経路の周辺に複雑に広がっていることがわかる。

二つの経路のうち北側に位置するハサカ県から二ナワ県に入る経路沿いには、シャンマル族とジャブール族がシリアとイラクの国境をまたいで分布している。シャンマル族はハサカ県北部からイラクの二ナワ県モスル、タル・アフアルにかけての地域を中心的な居住地にしており、シャンマル族の移動・遊牧の範囲はバグダード西郊からデイル・ゾール、ラッカ方面も含む広範囲に及んでいる。シリアとイラクのシャンマル族の結びつきは強固で、シャンマル族はシリアとイラクとの国境が画定された後も国境を気にすることなく往来していた。

ジャブール族は、ユーフラテス河の左岸に住んでいたが19世紀にアカイダート族に敗れて現在の居住地に移動した。現在の居住地は、ハサカ県の中部と南部、イラクのバグダード、カルバラ、キルクーク、モスル、タル・アフアル、ティクリートなどで、シャンマル族の居住地の南隣にあたる地域となっている。

二つの経路のうち南側の経路であるデイル・ゾール県からアンバール県に入る経路沿いには、アカイダート族、バカーラ族、ドゥライム

族、アナザ族が居住している。

「メソポタミアへの新しい道」とCSISの報告書が潜入多発地域と述べた地域では、アカイダート族の勢力が最も強い。アカイダート族は、19世紀にデイル・ゾール県のユーフラテス河沿岸に移動し、先住のジャブール族を北へ、ドゥライム族を東へ移動させてユーフラテス河沿岸地域を獲得した。特に、イラクとの国境に隣接するブー・カマルの部族民はすべてアカイダート族で、彼らは第一次世界大戦後にイラク方面からシリアに侵入した英国軍をブー・カマル付近で撃退し、イラクのカーイムに撤退させたこともあるなど、同地はアカイダート族にとって重要な都市となっている。しかし、アカイダート族の居住地はブー・カマルより東には広がっておらず、アカイダート族の居住地はシリアとイラクとの国境をまたぐ形にはなっていない。

バカーラ族は、デイル・ゾール市の部族民ではない住民と婚姻関係で結ばれている上、近隣の諸部族との関係も良好である。バカーラ族の居住地域はデイル・ゾール市の対岸の地点からユーフラテス河の上流方向へ40キロメートル、下流方向へ70～80キロメートルの範囲で、イラクとの国境地帯まで達していない。

ドゥライム族は、イラクのアンバール県の有力部族で、シリア国内にはラッカ県に支族の一部が居住している。しかし、19世紀にアカイダート族に敗れてユーフラテス河沿いの居住地域の一部を失ったため、現在のドゥライム族の分布はシリアとイラクの国境付近で分断される形になっている。

アナザ族はハラブ、ハマ、ヒムス、ダマスカス、タドムル(パルミラ)に広く分布し、シリア砂漠

に住むその他の部族すべてから貢納を取り立てた有力部族である。上で説明したアカイダート族はアナザ族に反抗し、ユーフラテス河沿いに居住するアナザ族の支族であるアマーラート(al-'Amarāt)族と抗争した。アマーラート族は、カルバラからアンバール県のユーフラテス河沿いの地域と同県西部のルトゥバに分布している [Zakariyā, 1997, 365, 443-444, 565-568, 568-569, 568-569, 568-586, 574, 612-635, 641-645; al-Ḥamad, 2003, 560-562]

潜入経路沿いの部族の分布と状況説明から、シャンマル族、ジャブール族、アナザ族は、シリアとイラクの国境地域や潜入経路沿いだけでなく、イラク国内各地にも分布していることがわかる。このことから、この3部族がシリアとイラクの間の密輸で重要な役割を果たしていたり、ヒトやモノをイラク国内の各地に送り届けるための高い能力をもっていたりすることが推測可能である。一方、アカイダート族、バカーラ族、ドゥライム族の3部族は、シリアとイラクとの国境をまたいで分布しているわけではない。そこで、この3部族についてはシリアとイラクの間の密輸で重要な役割を果たしていたり、ヒトやモノをイラク国内の各地に送り届けるための高い能力をもっていたりする可能性が低いと推測することができる。特に、居住地をめぐる争いを経て現在のような分布状況になったアカイダート族とドゥライム族については、友好・協力関係を築くことが難しいと推測される。

イラク戦争勃発前後から「潜入問題」が顕在化した2005年半ばまでの短期間に、イスラーム主義勢力がシリアとイラクの国境地域に浸透したり、抜け道や部族の状況についての知識や物資輸送の能力を獲得したりして案内者の役割を

果たすため能力を得ることは困難だったと思われる。そこで、イスラーム主義勢力が潜入者を受入者まで確実に送り込むためには、金銭の支払いなどを通じてすでに案内者に必要な能力をもっている部族民の協力を得ることが最も合理的であるとの仮説を立てることができる。部族民が案内者の役割を担っているとするならば、案内者は「潜入問題」のその他のアクターと異なり、イスラーム主義勢力の思想に共鳴していたり、その組織の構成員であったりする必要はないことも仮定できる。

「潜入問題」に関する「指南書」や研究報告の分析と、潜入経路沿いの住民についての考察の結果、この問題について二つの重要な要素を指摘することができる。

一つ目の要素は、イスラーム主義勢力が潜入者をイラクに送り込むためには、事前に案内者を確保しなくてはならないことである。

二つ目の要素は、案内者を確保するためには、抜け道についての知識と物資輸送能力をもつ地元住民、すなわち密輸に従事する部族民の協力を得ることが最も合理的であるということである。

しかし、「潜入問題」のアクターのなかで非常に重要な役割を担っているにもかかわらず案内者の実態はほとんど解明されていない。また、本稿で部族民の状況を説明したり部族民が案内者の役割を担う可能性があるという指摘したりしたことも、推測と仮説の域を出るものではない。したがって、「潜入問題」の実態を解明するためには、案内者の実態を解明すること、すなわち部族民が案内者の役割を果たしているとの仮説を実証することが研究課題となるのである。

(2006年4月12日脱稿)

(注1) 例えば、共同通信(2004)によると、米軍高官が「イラクで相次ぐ自爆テロの実行犯の多くは国外から潜入した外国人であるとの認識を示し、そのほとんどがシリア国境とイラク国境を通過している」と指摘している。また、Mlik(2004)も、米中央軍の司令官が「シリアとイランがイラクの不安定化に寄与している」と述べたと報じた。その上、米国とイラクからは「外国人テロリスト」がシリアを拠点としているとの非難も相次いだ。これについて、Macdonald(2004)は、イラクの国防相が「シリアとイランがザルカーウィー派を支援している」と非難したと報じている。さらに、『毎日新聞』(2005)によると、米中央軍司令官が「ダマスカス、アレppo、ハマなどのシリアの都市に武装勢力の支援拠点が存在しているが、シリア政府は十分な取締りをしていない」と非難している。そして、Gearan(2005)は、駐イラク米国大使が「シリアによるイラクとの国境管理について忍耐が尽きかけている」と警告したと報じている。

(注2) 2004年10月17日にザルカーウィーがビン・ラーディンに忠誠表明をしてタウヒードとジハード団(Jamā'a al-Tawhīd wa al-Jihād)から改称。2006年1月15日に他のイスラーム主義団体5団体とともにイラクのムジャーヒドゥーン・シュラー評議会(Majlis Shūrā al-Mujāhidīn fī al-'Irāq)を結成した。

(注3) なお、アラブ民族主義者については、彼らがイラク戦争勃発前の政体の復帰やイラクからの占領者の排除を目標とし、イラクという枠内で米国に対する武装闘争を行っているため、イラク国外で非イラク人を勧誘しイラクへ送り込む動機に乏しい。実際、アラブ民族主義者による潜入のための情報提供は本稿執筆時点では未発見である。このため、本稿においてはアラブ民族主義者による流入についての言及は最低限にとどめる。

(注4) 原文中ではモスル県と記されているが、ニナワ県の誤りである。

(注5) アラウィー派のこと。

(注6) サラフィー主義とは、イスラーム創成期の父祖(サラフ, salaf)の行いに回帰することによってイスラームの復興を目指す考え方で、具体的にはイスラーム法の厳格な施行を目標とする立場。ジハード主義とはジハード=武装闘争によってイスラームの拡大や防衛を図る考え方であるため、ジハード主義的

サラフィー主義として両者を重ねて用いると、武装闘争によってイスラーム法の厳格な施行を実現することを目指す立場を意味する。

(注7) 『毎日新聞』(2006)によると、自爆犯夫妻のイラクへの潜入を手引きした集団はイラクの武装勢力と連絡をとって自爆要員を送り込んでいた集団であり、2005年7月からベルギー当局の監視を受けていたとされる。

(注8) 「これがイラクへの道」が流布した時点での最新のビン・ラーディンの説教は、2004年12月27日にアル=ジャジーラTVが放送した音声声明と思われる。声明は、ザルカーウィー派がアル=カーイダに合流したことを偉大な措置として歓迎する内容を含んでいる。

(注9) イスラーム国民抵抗(al-Muqāwama al-Islāmiya al-Wataniya)の軍事部門。1920年革命とは、第一次世界大戦後にイラクに進駐した英国軍に対する全国規模での蜂起で、1920年革命部隊とはこの事件にちなんだ命名。なお、イラク国民イスラーム抵抗は、2005年7月25日にイスラーム抵抗運動(Harakat al-Muqāwama al-Islāmiya)に改称し、イスラーム主義の性質を強調、イスラームやイスラームの地を防衛するために外国人が抵抗運動に加わることに理解を示す声明を発表した。(http://www.hdalsalam.com/ 2005年7月閲覧)

(注10) 事例研究中ではal-Waleedとしているが、報告書本文中のBab al-Waleedと同一。

(注11) 「メソポタミアへの新しい道」でal-'Akaydātと表記された部族と同一と思われる。

(注12) 「メソポタミアへの新しい道」でal-Bakāraと表記された部族と同一と思われる。

【文献リスト】

日本語文献

共同通信 2004. 「入国経路はシリアとイラン イラク潜入テロ犯で米軍」3月5日.

『毎日新聞』2005. 「イラク 外国人テロリストの割合増 米中東軍司令官が指摘」3月28日.

2006. 「イラク ベルギー人自爆テロ 白人女性初、欧州に衝撃」1月7日.

外国語文献

- Castaneda, Antonio 2005. "Iraq-Mule Caravans." AP, August 10.
- Gearan, Anne 2005. "US-Iraq-Syria." AP, September 12.
- al-Ḥamad, Muḥammad 'Abd al-Ḥamīd 2003. *'Ashā'ir al-Raqqā wa al-Jazīra al-Tārīkh wa al-Mawrūth History of Raqqā Tribes*. al-Raqqā Muḥammad 'Abd al-Ḥamīd al-Ḥamad.
- Ḥasan, Humam 2006. "Ṣaddām Awwal Man Sa'ā ilā Jadhb al-Tanzīmāt al-Islāmiya thumma Nadima 1 min 2." *al-Ḥayāt*, February 25.
- Macdonald, Alastair 2004. "Iraq minister blasts Iran, Syria, says aid Zarqawi." Reuters December 15.
- Mlik, Adnan 2004. "Bahrain-Abizaid." AP, July 20.
- Obaid, Nawaf and Cordesman, Anthony 2005. *Saudi Militants in Iraq Assessment and Kingdom's Response*. Washington Center for Strategic and International Studies.
- Zakariyā, Aḥmad Waṣfī 1997. *'Ashā'ir al-Shām*. Damascus Dār al-Fikr.

(たかおか ゆたか / 中東調査会研究員)